

碩学 平田 渡先生へ感謝を込めて

外国語学部長
外国語教育学研究科長
竹 内 理

過去のような出来事について分からないことがあると、私は迷うことなく平田先生に尋ねてみることにしている。「先生、～について教えてくださいませんか。」すると先生は、「竹内君、それはね、～だよ。」と気さくに、そして明快に教えてください。私にとっては（そして多くの同僚にとっても）、平田先生は、まさに生き字引のような存在なのだ。先生はお忘れかもしれないが、「現在の出来事の意味は、歴史の流れを解さずには分からない」とおっしゃっていたことを、私は折りにふれて思い出す。けだし名言である。その平田 渡先生が、実に40年の長きにわたる関西大学での学究生活を終え、ご退職になられる。寂しい限りである。

先生の碩学ぶりは尋常でなく、ご専門であるイスパニア文学・文化の話はもちろんのこと、日本文学・文化の話、言語や教育の話、さらには趣味の海釣の話や車、ワインの話まで、周りにいるものを圧倒する。読書量はおそらく大変なものだと推察される。ただ、先生は読書に使われる時間と同じくらいに、若い教員と話す時間も大切にされた。その中で、文学の面白さに気づいたもの、日本語への意識を高めたもの、新たな視点を得たものがあることを見ると、人を育てる際の「対話の大切さ」を、他の誰よりも認識されていたのではないかと考えてくる。

また、先生は人に感謝する言葉を惜しまない方でもある。作業をご一緒させていただいた8年前の外国語学部開設にかかる各種行事で、自ら様々に差配を振るわれたにも関わらず、「我が勲なきがごとく」振る舞われ、下支えしたものに感謝をされていた。その姿を思い出すと、ともすれば自らのことばかり考えがちな大学教員の中であって、周りへの配慮を欠かさない先生の存在は希有なものであり、そして見習うべきものであると感じる。

そんな平田先生に、20数年（といっても先生のキャリアの半分程度なのだが）も同僚として接することができたのは、私の僥倖の1つだったといえよう。

先生、ありがとうございました。そしてまた、折に触れ、色々と我々に教えてください。